

# 第 17 回「若者との対話（一）」

\*\*\*

孔子の弟子達。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 17 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

株式会社フジテレビ KIDS 東京都港区台場 2-4-8

今回は「若者との対話」の第一回をお話しします。

若者と言いましても、一般の若者でなく、孔子の弟子達についての話です。

もちろん、当時たくさんの若者がいたわけですが、孔子が実際に接触したのは、孔子の学校に来ている若者、弟子達であります。

孔子は、その一生におきましてずっと、学校、また学校に似たような形のものを経営していました。これは大体大きく三つほどの期間に分かれるかと思えます。

【第一期】（約10年）孔子は20代。

孔子の伝記につきましては、後の回にお話しますが、大体20歳の中頃くらいから、世に出てきたようであります。

しばらくの間、学校というよりは塾、といっても自宅に数人の若者が集まってくる、そういった程度のものであったかと思えますけれども、そういった小さな生活の中での弟子達の集まり、それが第一期でしょう。

20代中頃から、30代過ぎくらいまで、そういう状態であったかと思えます。

一応、正確な伝記とされております、<sup>しばせん</sup>司馬遷が書いた<sup>しき</sup>『史記』にありますが、34、35歳頃、孔子はどうやら都に勉強に行ったようです。生まれは魯<sup>ろ</sup>という、中国の東北部の小さな国です。



司馬遷

出典：国立国会図書館

そこから都に留学。そして帰国します。都に留学したことは大きな履歴になりますので、そこで本格的に学校を開いたと考えられます。やがて人々が集まってきます。その間は自分なりの活動をします。学校と言いますと、今日では、いわゆる校舎があって、教員がいて、学生や生徒がいてという教育機関と理解しますが、当時は、そういうことだけに止まらなかったのです。いろいろな人、若者が集まってきますから、そこに、ある集団の力が出てくるわけです。しかも、孔子と弟子達が目指していたものは、政治的な働きをしたいということです。それが最終の狙いです。

【第二期】（約 35 年）孔子 35～69 歳。

その集まりは、自然と政治的な集団になっていくわけです。そういう塾は、孔子の塾以外にもいくつかあったと思われます。その中で、孔子達が勢力を伸ばしてきたというわけであります。

そこで孔子は 50 代を過ぎましてから、祖国で次第に政治的立場を強めていきまして、ついには、今日で申しますと閣僚、大臣にまで登っていくのですが、当然、この新興勢力に対して、反感を持つ者も出てくるのです。それは従来 of 既得権益を持った人達でもありましょうし、嫉妬する集団もあったでしょう。

それで孔子は失脚を致します。その話はいずれ致します。

それから彼は流浪の旅に出るわけです。54、55 歳からと思われませんが、それから約 10 数年流浪の旅を続けてから、68、69 歳と言われておりますが、故郷に再び帰ってきます。

この間、39 歳から 69 歳、これが第二期。

【第三期】（約5年）孔子69～74歳。

帰ってきてから、また塾を始めます。これは長い長い流浪の旅を続けて、苦勞を重ねた後ですから、孔子も落ち着いて、塾を經營したのでしょう。そうしますと、孔子の名は、中国中に広まっていたので、全国から塾を目指してくるわけです。

孔子は74歳、あるいは73歳、その頃亡くなっておりますから、5年間くらいだったということです。この5年間は第三期。

これで、孔子の塾は一期、二期、三期と分けて考えます。それぞれ、みな性格が違います。

それでは各時期の弟子を紹介します。

【第一期の弟子】代表的な弟子 しろ子路

孔子も若かった。その頃の学生諸君は、孔子と齡がそう変わらなかった。



子路

出典：国立国会図書館

どちらかと言えば、兄貴分という気持ちで来たでしょう。そういう弟子の中には、自分の力を見せつけるような、若干、浅はかな連中ですが、そういう者もいたわけです。

例えば、子路という弟子は代表的であります。

子路は、ずっと、孔子と生活を共にしていました。

【第二期の弟子】代表的な弟子 <sup>しこう</sup>子貢、<sup>がんかい</sup>顔回

第二期になりますと、弟子達は孔子と長い旅をし、一緒に暮らし、いっしょに苦勞しました。その頃の有名な弟子には、子貢、顔回と言ったような人がおります。

【第三期の弟子】代表的な弟子 <sup>しか</sup>子夏、<sup>しちょう</sup>子張、<sup>そうしん</sup>曾参、<sup>さいが</sup>宰我

第三期に入りますけれども、第一期、第二期の弟子達というのは、孔子といっしょに生活をし、苦勞していますので、孔子とは、同志というような感じの関係と思います。弟子は弟子ですけれども、本当に親しい仲間、同志です。

ところが、孔子が落ちついて学校を開いていた第三期になりますと、弟子は全国からやってきますから、皆若いのです。50歳ほど年の離れた若い人達です。

この若い人達の中には、いわゆる世に言う秀才達も集まってきます。また、政治家としての地位を得たいという野望を持つ者もやってきます。



曾参

出典：国立国会図書館

第三期というのは、孔子にしてみますと、苦勞を共にして来た、それまでの一期二期の弟子達とは相当違っていると、孔子自身も思ったように見えます。先ほど申しましたように、一期二期の時代の学生はどちらかと言えば同志ですが、三期の若者達は、孔子も手に負えぬ連中であつたと思います。

子張という弟子の場合は、早く就職を世話してくださいと言いました。孔子の塾では、人材を養成しておりますから、全国から政治的力量のある者を推薦してほしいとの要望が絶えずあり

ました。孔子は推薦状を付けて送り出します。弟子は相手国で有力な地位に就くことができたのです。

そういうことで、野望を持った若者がやってくる。子張のようにずけずけと望みを口にするような者も出てきました。

このように、三期の学生諸君は若いということもあって、一期二期の学生達とはずいぶん違う、そういう状態でした。

そこで、弟子達について、残した有名なことばがあります。

こうせい おそ べ  
「後生 畏る可し」(子罕第九)

「畏る」は感心するというような意味です。「後生」は、後に生まれてきた者ですから、若い者。若い者はだめだという意味ではありません。若い者はすごいなぁという感じです。

しかし、本当に感心してすごいと言ったかどうかは別だと思います。先程の子張のように、やってきてはすぐ就職の斡旋を頼むような、一期二期にはなかったような、身勝手に厚かましいことを平気で言うような若者もいたわけですから。しかし、ちゃんと塾で勉強はできるわけです。

三期の学生たち、中でも子夏、曾参は孔子の学問を伝えていきます。

一期二期の人たちは高齢者ですから、学問を次の世代に繋ぐというより、自分の代で終わってしまいます。

三期は若いので、孔子亡き後、孔子の学問を後世に伝えていくという重要な仕事をしていくわけです。中でも子夏は重要な人物です。孔子にしてみると、三期の学生達は、なかなか優秀で、気構えも十分である。そういう点で「後生 畏る可し」と孔子は言ったのでしょう。

尤も「すごいなぁ」の裏には、皮肉もあるかと思います。お前達は頭ばかりが先走っているじゃないか、との気持ちもあるように感じられます。

「後生 畏る可し」の全文を読んでみましょう。

「子曰く、後生 畏る可し。焉んぞ来者の今に如かざるを知らんや。」

四十・五十にして聞こゆる無きは、斯れ亦畏るるに足らざるなり」(子罕第九)

「後生 畏る可し」は、先ほどから申しました通りです。

「焉んぞ来者の今に如かざるを知らんや」「来者」は来る者ですから後生と同じく若者。「今」は現在の者、現役の人達に及ばないと、どうして言えようか、と言っています。現在中心になっている人達より、若者達が劣っているということはないぞ、ということです。

その後、補っています。

「四十・五十にして聞こゆる無きは、斯れ亦畏るるに足らざるなり」若い者は大したことがないと言う40歳、50歳とて、世の中で名を挙げられず、平平凡凡な連中もたくさんいる。大したことはないとする若者達と同じじゃないか、とはっきりと言っています。

若者達に期待している様子が、十分に現れていると思います。

「後生 畏る可し」の「後生」は、三期の学生達のことです。それでは、一期二期の弟子達については、どういう気持ちであったか、ですが、ことばは残っておりません。しかし、一期二期の学生と孔子がそれぞれ話をしていることばがいくつも残っております。

そういうものをひっくるめて、申しますと、「後生 畏る可し」というよりは、「愛すべし」という気持ちのように思います。

繰り返し申しますと、三期に分けた弟子達のうち、一期二期の弟子達は同志。三期の学生達に対しては、孔子は非常に期待もし、もっと教えたいという気持ちがあったかと思われれます。

孔子以後、三期の学生達が活躍していくわけです。

今回は「若者との対話(一)」をお話ししました。